

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	マクシム・デュ・カン再評価 : フロベールのépilepsie肯定論をめぐって
Author(s)	戸田, 吉信
Citation	フランス文学 , 15 : 1 - 11
Issue Date	1985-05-15
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00040940
Right	
Relation	



マクシム・デュ・カン再評価

— フロベールのépilepsie 肯定論をめぐって —

戸田吉信

再評価といえは少々大げさかもしれないが、最近マクシム・デュ・カンの記録や証言をいま少し虚心に読もうとする気運になっていることはたしかである。ただし、これはあくまでも記録・証言のたぐいについてであって、彼の作品自体を今日的関心をもって読み返そうというのではない。たとえ *Les Chants modernes* (1855) が本格的な産業化時代に突入したフランスを素朴に讃える体制的知識人の声として引用され、また *Les Forces perdues* (1866) が *Volupté* から *L'Éducation sentimentale* に至る作品の系譜において語られることはあっても、デュ・カンは時代の証言者、とくにフロベールとの関係において記憶されるだけの存在でありつづけるだろう。

周知のように、*Souvenirs littéraires* 二巻にはフロベールとの交遊の回想が、全編にわたって縦軸のように主旋律を奏でており、他の回想録においてもそれは重要な比重をしめている。青年期からほぼ生涯にわたる二人の交遊録は、読物としてはなかなか面白いのだが、従来、研究者たちはこれにたいしておおむね疑い深い眼を向け、時として明からさまに不快の念を隠そうとしなかった。その理由としては、記述に事実の誤りがやたらと多いからでもあるが、フロベール研究家たちは、何よりもコンプレックスを裏返しにしたような優越的語り口そのものに不信の念をいだいたのだった。三流作家デュ・カンが自分をたえずフロベールの上位に置こうとする底意が人々には透けて見えるのだ。フロベールを時には見下し、時には子供扱いにし、彼を世に出してやったのは自分だとする保護者的態度が、何とも焦立たしいのだ。チボーデのような透徹した眼力を備えた批評家さえ、デュ・カンの幾つかの文章は「中傷と羨望の本能」⁽¹⁾によって書かれたものと断言してはばからない。

それだけではない。*Madame Bovary* の原稿を一刻も早く自分の主宰する *Revue de Paris* にと迫るデュ・カンにたいし、フロベールが頑として耳を貸さず、自分は一字一句たりとも納得のいかないものを公表するわけにはいかないと大見栄をきるとき⁽²⁾、人々にはこのカップルがまるで文学の典型的な聖者と俗人のように見えるのだ。

私がここで紹介してみたいと思う *épilepsie* 肯定説は、フロベールがわの人々から憎しみに近い反感をもって受けとめられた文章の最たるものである。

よく知られているように、デュ・カンはフロベールのいわゆる「神経症」について、発

作時の状況と受けた治療を自身の目撃談として詳しく語っている。そしてこれを「聖なる病、極度の神経症、パラケルススが人間の地震と呼んだあの神経症」⁽³⁾つまり *épilepsie* と断定した最初の人間だった。さらにまた、彼は自分にとって理解を絶するよう思えるフロベールのさまざまな文学的配慮、異常なまでの文章推敲と資料蒐集癖、それにフロベールの特異な性癖をことごとくこの病のせいにして、フロベールはこれによって完全に成長がとまったとさえ断定し、「私はゆるぎない確信をいだいている。ギュスターヴ・フロベールは稀有な才能に恵まれた作家だった。もし神経の病に冒されなかったら、彼は天才として名声を博したであろう」⁽⁴⁾と臆面もなく書くのだ。

デュ・カンの解釈のほうはいましばらくおくとして、その目撃談は徹頭徹尾彼の創作になるものとしてしりぞけられてきた。ところが、最近一人の科学者から、デュ・カンの証言は科学的に十分信憑性をもった客観的資料であるとする注目すべき発言がなされた。さらに、精神分析論の批評家マルト・ロベール女史はその近著において⁽⁵⁾ *épilepsie* 肯定説を自己のフロベール論に援用しつつ、デュ・カンの証言を一蹴した人々のメンタリティそのものを問うている。

前者はいささか旧聞に属するが、1969年 *L'Éducation sentimentale* 刊行百周年のシンポジウムで発表された、医学史研究家ガルラン博士の「今日の医師たちから見たフロベール」⁽⁶⁾と題する報告である。

ガルラン博士は、今日の医学者たちから見ればフロベールが *épilepsie* であったという事実は疑う余地がなく、しかも最初発作を起こしたときから彼は *épilepsie* の治療を受けた、とまず断定する。その判断の根拠となる唯一の資料はデュ・カンの証言であり、博士はこれが科学的に信頼に価するものであることを論述の過程で明らかにしていく。論点は大きく分けて二点に絞られる。第一に、デュ・カンがじっさいに目撃し、観察記録のようにつづっているフロベールの症状について。ある人々は、これはデュ・カンが当時の医学書から適当に症例を集めてきたでっちあげだろうと考えたが、それこそ根も葉もない空想としりぞけられる。*Souvenirs littéraires* の時代には、*épilepsie* についてごく一般論しか知られておらず、その多様な臨症例は報告されていないという明解な理由からである。

デュ・カンは、発作の核心部を次のように語っている。

私としてはどうすることもできず、ただ狼狽しながら、この発作の場面を目撃したことがあるが、見るからにものすごい光景だった。発作が起るときの状態はみな同じで、いつも同じような現象がその前に見られた。突然、取り立てて理由もないのに、ギュスターヴは頭を上げ、顔面蒼白になっていく。あたかも飛翔する精霊のように頭上をよぎっていく神秘的な息吹ともいふべき、あの前駆^{あう}症状を感じとったのだ。彼の目は不安にみち、悲しげ

にぐったりとしたしぐさで肩をすくめ、「左の目に炎が燃えている」と言うのだ。それから何秒かすると、「右の目にも炎が燃えている。何もかも金色に見える」と言った。ときとして、この奇妙な状態が何分間も続くことがあった。しかしこの段階ではまだ、彼は警報を受けただけですむと思っているようだった。ところがそれから、顔色がさらに一層蒼白になり、絶望の表情を浮べていく。と彼は急いで歩き出し、ベッドに向かって走り、まるで生きながら柩のなかに入っていくように、ぐったりと、不吉な顔でそこに横になるのだった。それから彼は叫ぶのだ。「手綱は握っているぞ。荷馬車だ。鈴の音が聞える。あっ、宿屋の明りが見える。」ここで一声呻き声を発するのだが、その悲痛な調子はいまでも私の耳に響いてくる。そして痙攣が彼のからだをふるわせるのだ。⁽⁷⁾

この両眼に「炎が燃え」「何もかも金色に見える」状態こそ、*épilepsies du lobe temporo-occipal* (側後頭葉癲癇) がもたらす視覚的アウラの正確な記述だという。さらに、発作の合間に患者には幻覚状態がつづき、その間アウラは弱まりこそすれ依然として保たれていると今日の知識は教えてくれるが、フロベールのケースも明らかにこのことをしめしている。それにデュ・カンの述べている特徴的なアウラ状態について、何よりもフロベール自身が同じことを幾度か語っているのである。⁽⁸⁾

次に、最初の発作のときからフロベールにあたえられた治療について。彼は生涯ほぼ忠実にこれをまもってきた。父がおこなった治療について、デュ・カンに次のような記述がある。

はたして、この神経の発作は何度も続いて起り、それから二週間のうちに四度も起った。フロベールの父は絶望した。そして運悪く、父はブルッセ(医学者。瀉血を唯一の治法とした。1772-1838) 学派に属していたために、徹底的に瀉血をほどこす以外に治療法を見つけることはできなかった。すでに危険な状態にあった神経の昂まりはこれによっていよいよ亢進するばかりであった。ある日父がギュスターヴに瀉血をほどこしたとき、腕の静脈から血が出てこなかったのに、息子の手に湯を注がせたのだが、注いだ者がすっかり狼狽して湯が沸騰しかけていたのに気がつかなかったので、不幸な息子は水泡性の火傷を負ってしまい、いたく苦しむことになった。「極度の多血質、体力過剰、気力過剰」とフロベールの父は言い、病人にはリキュール類、葡萄酒、コーヒー、こってりした肉類、煙草などが禁じられた。かわりに、鹿子草と藍とカストレウムがやたらにあたえられた。彼はすっかり諦めて薬を服用し、かさかさの肉を食べ、煙草もきっぱりやめて、オレンジの葉の煎じ薬を飲みながら人の好い微笑を浮べて「ソーテルヌ(自曹葡萄酒の産地)の葡萄酒のほうがまだましだな」などと言っていた。彼は父の書棚から神経病に関する書物を取り出して読んでいた。読んだあと「ぼくはもうだめだな」とよく私に言った。⁽⁹⁾

これらはいずれも、二十世紀の人々から見るととうてい *épilepsie* の治療とはいえないところから、従来 *épilepsie* 否定論の有力な根拠になったものである。しかしながら、医学史研究家ガルラン博士は、逆にここに記されているもろもろの事柄こそ、実はルイ＝フィリップ時代の *épilepsie* 治療法を正確に再現したものであるという。この時期には、アメデ・デシャンブル博士の手になる *Le dictionnaire encyclopédique des sciences médicales* という書物が、文字通り医学の聖典として流布していた。これは当時知られているかぎりの病気の症状と治療法を網羅したものだが、ガルラン博士によれば、ここに記されている *épilepsie* の処方⁽¹⁰⁾は正確にデュ・カンの記述と一致するというのだ。すなわち、「短く、反復される瀉血」 *saignées courtes et répétées*. 「軽い下剤」 *les purgations douces (castoreum)*. カストレウムとはひまし油のことである。「頸部の串線」 *les sétons dans le cou*. これらの治療を受けたことについては、フロベール自身何度も語っているところである。さらに菩提樹とオレンジの花の煎じ薬、冷水療法と暖い地方への滞在。フロベールが晩年に至るまで、クロワッセを流れるセーヌ河で泳ぐのを日課のようにしていたこと、やはりデュ・カンの証言にあるが、二人で東方旅行を企図したさい、父の友人である解剖学者クロケ博士から「暑い国への旅が息子さんの健康によい」という手紙を母宛てにもらって、やっとしぶる母を納得させたという事実が思い起される⁽¹¹⁾。

デシャンブル博士が *épilepsie* 患者にたいする禁止事項としてあげるものも、フロベールの生活に重ね合わせてみると示唆的である。結婚および女性との同棲生活、試験を課されるような勉強、それに音楽が禁止されるのだ。1844年の発作がフロベールを学生生活から最終的に解放したのは、周知の事実である。彼の父がすぐさまこの措置をとったのだ。またフロベール自身結婚を忌み嫌っていたことはたしかだが、1846年に父が死んだのち、母と息子のあいだで、結婚が話題になった形跡はまったくない。音楽についてはどうか。フロベール自身の音楽的資質と趣向は別として、早逝した妹のカロリーヌはピアノの名手だった。妹の思い出を大事にとどめていたクロワッセの家で、妹の忘れ形見をすべての点で母親に似るように育て、教育したにもかかわらず、ピアノだけは課されたふしがないのである。成長した娘が母のピアノに向うのを祖母と叔父が見まもる光景を、当然われわれは期待していいはずである。ガルラン博士は、「ピアノはだめ、ギュスターヴの神経によくないから」という母の声が聞こえるようだと記している。

音楽とは逆に、デシャンブル博士の著書は文学ないし文学の研究をすすめている。これによって、*épilepsie* 患者は「心が安まる効果」 *une vertu apaisante* があたえられるというのだ。 *Une vertu apaisante*. フロベールの人と文学に関して、何と多くのことを語ってくれる言葉だろう。フロベールが、ただ自分のためにだけ書くと称してひたすら文学の世界に閉じてもるのは、困難の極致ともいうべき作業を通して、世のいっさいのことがらにた

いする怒り、悩み、焦立ち、また倦怠までもが鎮められ、文字通りそれが彼の救いとなるからではないのか。書くという行為を通してしだいに確立されてくる内面の安らぎと静穩。初稿 *L'Éducation sentimentale* から *Bouvard et Pécuchet* に至るまで、それはフロベールにとって書くことの秘そかな目的でさえあった。⁽¹²⁾ さらにまた、実学によって産をなした中層ブルジョワジーの典型であり、息子がいわゆる三文文士になるなどとうてい許さなかった彼の父ではあるが、家に蟄居するようになった息子が文学に向うのを最終的には黙認する事実を、どのように考えたらいだろう。

符牒はすべてぴたりと一致する。デュ・カンの証言は創作であるどころか、ガルラン博士によれば事実を正確に語ったものであり、「科学的にも文学的にも範とするに足る」と⁽¹³⁾ されるのである。

精神分析論的研究とくにカフカの研究者として著名なマルト・ロベール女史が、その著書でまず引き合いに出すのは、フロベールと同年のドストエフスキーの場合である。ドストエフスキー *épilepsie* 説は、すでに確立された事実として広く受け入れられている。そればかりか、人々はこの天才の秘密の深い淵源をこの病気にもとめることさえしてきた。*Epilepsie* であるという事実は、天才の偉大さといかなる意味でも抵触することはないのだ。これに反して、フロベールの場合、*épilepsie* というレッテルをはることに、人々は何かショッキングで、眉をひそめるような気持ちをいだいてきた。それはまるで、これによってこの文学者の聖性が汚されるのを恐れるかのような感情に似ている。これはまことに奇妙なことではないかというのである。一方、彼に *hystérique* という呼称を冠するとき、人々は何の疚ましさも感じないのだ。ともかくそれは、あくまで *épilepsie* に固執しようとするドストエフスキーの場合と逆の現象である。フロイトがドストエフスキーを単純な *épilepsie* でなく *hystéro-épilepsie* と呼んだとき、それはむしろ不評を買い、人々をこれをしりぞけようとした。⁽¹⁴⁾

もっとも、以上のことには若干微妙な問題がないともいえない。フロベールは生前、自分の病気を正確にそれと名ざしたことは一度もないからである。少なくとも書簡のなかでは、ほとんどの場合、それはたんに *mes nerfs* とだけ呼ばれている。自分のことを平気でヒステリーの女と呼び、エジプトの舞姫から梅毒を移されたことをむしろ誇らしやかに語っているフロベールが、この点に関するかぎり、いっさい口を噤んだままなのだ。

それに、ドストエフスキーの作品には正真正銘の *épilepsie* 患者があちこちに顔を出し、激しい発作のさまを読者に見せつけてくれる。ところがフロベールの世界には、*épilepsie* 患者は一人として存在しないのだ。彼の人物、とくに主人公たちが正常な、均衡のとれた精神と神経の持主でないことはたしかである。しかし、彼らはいずれも医学的にいえば、通常のノイローゼ患者 *névrosés ordinaires* また *hystériques, abouliques, impuissants*

などと呼ぶべきであり、あるいはただたんに正常な患者 *sots* にすぎないと、ロベール女史は言うのである。作品から *épilepsie* にかかわるいっさいを意図的に消去しているというより、まるでそれは「作者にまったく経験がないので、これについて語る理由もなければ口を閉ざす理由もない」⁽¹⁵⁾かのようなのである。女史はこれを、フロベールの没個性という文学制作理論の結果として説明しているが、これは一つの有力な解釈であろう。

フロベールは書簡のなかで一度も正確な病名を語っていないにもかかわらず、そこで幾度か語られる症状は、ドストエフスキーの人物の呈するそれときわめて類似性をもっており、それは現代医学から見れば何ら疑う余地のない *épilepsie* の症状である。ロベール女史は、ガルラン博士の所論を非のうちどころのないものとみとめ、フロベールの発作を何度も目のあたりにし、治療のさまを見てきたデュ・カンは、*épilepsie* という事実をきわめて当然のこととして受けとっていたのではないかという。それに当時恥ずべきものと考えられていた病は、ほかにも幾つかある。ヒステリーもそうだし梅毒もそうである。そのなかで、なぜとくに *épilepsie* と名指すことだけが、友人をおとしめる意図に結びつけられねばならないのか。もしフロベールが、周到な配慮をもって秘密にしておこうとしたことを暴露したのなら、デュ・カンの不実、不信は問われてしかるべきかもしれない。しかし何度も述べたように、フロベール自身、何の後ろめたさもなく、平然と、発作のときの模様を書きかつ語っているのである。してみると、デュ・カンも別に下心なく、自分の見た事実を書きしるしただけではなかったのか。マルト・ロベールが問題にするのは、むしろフロベールのがわに立つ人々の精神の姿勢のようなものであろう。*Epilepsie* という事実をみとめることによって、フロベールの文学はいったい何を失うというのか？ またこれを打ち消すことによって、フロベールにあたえられる聖性とは何であるのか？ 文学者にとって、それはいかなる意味をもつものなのか？

マルト・ロベール女史にとって *épilepsie* を肯定することは、実は自身のフロベール論に有力な根拠を提供するものだった。周知のむきもあろうが、女史のフロベール論は、フロイトの「家族神話」説を援用し、フロベールのなかにことごとく対立し、決して相いれることのない二つの要素（彼女はこれを *Enfant trouvé* 及び *Bâtard* と呼ぶ）をみとめ、両者の葛藤・相克によって彼のいっさいを説明しようというものである。

たしかに、フロベールには文学と生活のあらゆる次元において、彼自身のいう *deux bonhommes distincts* ⁽¹⁶⁾ が存在していた。初期の批評家たちがロマン主義とリアリズムの対立を見た、抒情とエグゾチスムのなかに思うさまひたることを欲する人間と、冷徹犀利な分析的人間。「ガリアの若き武将を思わせる英雄的美貌」⁽¹⁷⁾とはうらはらに、行動にさいしては途方に暮れ、子供のようにたじろぐ無気力者。激しくたくましい情熱を夢みながら、友情においても恋愛においても「保護され、まもられることの必要な」⁽¹⁸⁾人間。人々にたい

して親切と寛大さを惜しみなくふりまくかと思えば、時として手のつけられない暴君とエゴイストに変貌する。時代と社会に深い嫌悪と怒りを表明しつつけながら、ナポレオン三世の第二帝政をごく自然に受け入れ、あまつさえコンピエーニュやサン＝グラシアン⁽¹⁸⁾の域の優雅なサロンで、上流社会の崇拜者たちにかこまれて悦に入った顔を見せる。民衆の悲惨に真正な同情をしめす反面、彼らの無知と低劣さにはほとんど呪咀に近い悪罵を投げかける。あくなき健啖と酒池肉林の夢を繰り広げる一方、砂漠の修道僧の禁欲精神に憧れてやまない。猥談とスカトロロジーを好み、血とサディズムに血をたぎらせる一方、純粹無垢な女性への夢を展開する。フロベールの根本的な性格は、つねに二様のかたちで表現される。これと同じく、彼の筆の下からは揺籃と墓、裸婦と骸骨、露の真珠と推肥のルビー、果肉と腐敗、氷と炎といった相反するイメージが奔しる。

マルト・ロベール女史にとって、*épilepsie* 患者という視点は、フロベールのこうした性格的特徴を見事に説明してくれるものなのだ。彼は決して通常の神経症患者 *névropathe* ではない。なぜなら、彼らは内面の軋轢・葛藤を何らかの妥協によって解決していくのが常であるのに、フロベールは本質的に「二重に分割された人間」⁽¹⁹⁾ *individu essentiellement dédoublé* であり、そこでこの相矛盾した要素は統合されぬまま、激しくぶつかり合い、せめぎ合いつつ露呈されていくというのである。

かくて、*épilepsie* に関する問題ははっきりと決着がなされたとされる。そのうえで、ロベール女史は幾人かの医師たちの説を参考にして、*épilepsie* 患者特有の性癖について述べるのだが、これはフロベールの文章創造に関する神話にある光を投げかけるものであろう。つまり、*épilepsie* 患者には「精神作用の緩慢さ」⁽²⁰⁾ *lenteur de l'esprit* が特有の性格として見られるというのである。知力・知性を欠いているというのではない。概念やイメージから思考を分離させ、形成していく能力の欠如である。彼は往々にして異常なまでの知性の持主であるが、観念を文章化していくさいに非常な困難を感じるという。このため、彼の思想は自由にのびのびと展開していく質のものでなく、それは凝固し停滞していく傾向をもつとされるのだ。

ガルラン博士とロベール女史の所論を、私見をまじえて要約・解説すれば大要以上のようになる。ガルラン博士のそれは、デュ・カンの証言のうちもっとも悪意ある中傷とし人々が眉をひそめた部分の客観性を立証したものだ。前述したように、このあと数ページにわたって、デュ・カンが彼自身の解釈というか、フロベール観を述べた部分がある。三流の人間が、一流の人間にたいして保つべき距離を無視したものとして悪評の高い文章だが、フロベールの研究の現状からして、ここにも無視できぬ問題があるように私には思える。

デュ・カンがここで語っているのは、大きく分けて二点である。一つは、肥沢な土壤に

名匠によって接木された木のように、見事な実を結ぶと期待されていた進歩が、神経の病によってとまってしまったということ。「ところが彼の神経組織が平衡を欠き、いま述べたような責苦が課されたときから、フロベールの進歩はとまってしまったのである。それはまるで、彼の知性の糸絛いとかせが突然もつれたかのようだった。成長のただなかで発育のとまった幼児たちのことを、乳母たちは『この子は尙僂病にかかった』と言うが、この言葉をそのまま彼に当てはめてもよかった。きわめて明晰で信頼のおける彼の記憶力はとみに減退をきたし、彼は自分でもそれを認めて、硫酸キニーネを多量に飲まされたせいにしていった。青春の日々に彼を駆りたててやまなかつたさまざま好奇心も衰えてしまった。その活動領域はしだいにせばまり、彼は一時の夢想到集中するようになった。⁽²¹⁾…」

「1843年2月、ルーアン市立病院の小さな病室で私が会ったときの彼こそ、そのまま全生涯にわたって変ることのない彼の姿だった。10年後、20年後、死の前日に至っても、彼はこのころわれわれを楽しませていたのと同じ冗談を繰り返し、同じ書物に熱中し、同じ詩句を礼讃し、同じ喜劇的効果をもとめ、同じことに夢中になっていた。…(中略)…彼の古くからの友人であり、その青春の証人であり、若い頃の夢や希望の聞き役であったわれわれは、彼が一向に進歩のきざしを見せず、もうすでにかなりのものだったその才能が、期待に反して一向に充実ぶりをしめさず、相も変わらず同じ円環のなかをぐるぐる廻っていることを確認して、しばしば驚いたものだった。…(中略)…彼は二十歳の頃にはすでに全作品についての構想をいだいており、これに具体的な形をあたえるために全生涯を費したのだ。⁽²²⁾」

進歩が完全にとまったとか、彼の才能が期待に反して一向に充実ぶりをしめさなかったという言い方は、たしかに穏当を欠くし、また問題でもあろう。しかしデュ・カンがここで述べていることは、明らかに今日のフロベール観に通底するものをもっているのではなからうか。私はいま、かつて書いた文章の一部を提出して問題を示唆しておきたいと思う。「『二十歳の頃にはすでに全作品についての構想をいだいていた』というデュ・カンの証言の内容は、今日、学問と批評によって一段とその意味が明らかにされているといえるだろう。全生涯を通じて書かれるべき全作品の構想をいだいていたというよりも、フロベールは二十歳前後で書くべきテーマをきわめつくしていたのだ。初稿 *L'Éducation sentimentale* 及び初稿 *La Tentation de Saint-Antoine* までをふくめた初期作品群において、彼は文学的感性を燃焼しつくし、描くべき人間を提供してしまったことさえいえるだろう。フロベールの文学的経験はそこで終止符をうたれるのだ。初期作品群をはじめ総合的に研究の対象としたジャン・ブリュノー教授は、その大著のなかで、フロベールが若い日々の暗い想念から芸術によって救われた自分自身を初稿 *L'Éducation sentimentale* のジュールに託して以来、それ以降の個人的経験、思い出、感情といったものは *Madame Bovary*

以後の大作においてほとんど使用されていないとまで断言している。つまり初期作品時代のフロベールの生、これがそのままのちの作品の素材になるというのである。換言すれば、初稿 *L'Éducation sentimentale* 以後、フロベールは『自分自身の生を生きることをやめて、みずからの過去の生でもって作品の人物たちを養うことをはじめる』⁽²³⁾のである。

いま一つは、フロベールの性格上のさまざまな奇癖と異常、それに文章制作のうえでの困難さである。「……ときには何か月も新聞を開こうとせず、外の世界のことには興味を失って、直接自分に関心のないことを人が語ることさえ我慢できなくなった。現実生活の観念が彼からなくなってしまい、果てのない夢想のなかに漂っている彼は、努力しなければそこから抜け出すことができないように見えた。うわべは平静なその生活をほんの些細なことが乱しても、彼は度を失った。ペーパーナイフが見つからないとあって、彼が大声をあげて部屋のなかを走りまわるのを、私は見たことがある。彼が仕事をするさいに、わけのわからない困難を感じはじめるようになったのもこの頃からである。私には彼がこの困難をわざと誇張しているように思えたが、ついに彼はこれを自慢するまでになってしまった。彼は削除した箇所一杯になった原稿を人に見せるのが好きだったが、ときには自分でも文章の続き具合がわからなくなっていた。彼は考えがすっかり混乱していて、デッサンの技術を不完全にしか知らないために色彩を「塗りたくって」いかないと形そのものが出てこない凡庸な画家たちのように、実際に書いてみなければ考えが明確になってこなかったからである。…（中略）…年月を重ねるにつれ、この彼の感じる困難はますます増幅されていった。『十一月』を二カ月で書きあげた彼だったが、『ブヴァールとベキュシェ』という小説には五年間を費し、ついに未完のまま残すに至ったが、これは『十一月』よりもさして長いとはいえないものである。工作中的彼は呻き、息を切らし、悪戦苦闘していた。煉粉を叩き上げるパン職人がやるように、よく『えいっ！』と声を出していた。それはペンを走らせる作家のわざというより、営々として汗を流す力仕事だった。鉦脈からついに一文を採掘するや、彼の疲労困憊はその極に達し、もうどうしようもなくソファに身を投げ出し、ぐったりとなって眠りこんでしまうのだった。⁽²⁴⁾」

『十一月』を二カ月で書きあげたというのは、例によって、デュ・カンの軽卒な誤りである。しかしながら、流れるように文章が奔っていた初期作品時代から、凄絶なまでの苦吟のはてに一語、一句を生み出す職人的作家及び力業的文体というイメージは、ここに明確に提出されていないだろうか。この点に関するフロベール自身の証言を、われわれは枚挙にいとまなくもっているし、「彼はいかにして *Madame Bovary* の作家になったか」という素朴な驚きこそ、チボーデのフロベール論の根底にあったといえるだろう。

もし、デュ・カンのがわに立つ人がいれば、人々の反発にたいして弁護が可能かもしれない。たしかに、彼は典型的な出世主義者であったろう。あらゆる機会を利用して、自分

を売りこみ、押し出していく。しかし、それが悪いことなのか？ 敗残の文学者が街に溢れている世紀中葉、裕福な医師の息子とはいえ、幼くして父を失い、何の手蔓もない彼である。それに野心に満ちた青年の覇気と行動力は、バルザックの世界が垣間見せてくれるように、この時代にはそれ自体一つの価値であり、むしろ肯定されるべき風潮にあったのではなかろうか。彼にとってフロベールの優柔不断は、どうしようもなく焦だたしいものだったにちがいない。それに、フロベールが生存中どれだけ偉大な作家とみなされていたかとなると微妙な問題だが、いわゆる名士としての知名度という点では、各界に知己も多く、最終的にアカデミーに迎えられ「不滅の人」となったデュ・カンの方がまさっていたことは事実だろう。多少の不和・軋轢はあったにせよ、長いあいだの友人で、ともかくフロベールを世に出してやった、あるいは少なくとも世に出るいとぐちをつくってやったデュ・カンにすれば、時に自分を高しとする語り口になるのもやむを得ないのではないか、等々。

ここに紹介した *épilepsie* 肯定論にかぎらず、デュ・カンの文章には、今日虚心に耳を傾けるべき所があることはたしかだろう。しかしながら、時に、どのような弁護論もむなしのではないかと思えてくることもまた事実である。たとえば、数年前 *L'Éducation sentimentale* の成立史を調べていたとき、私はこの作品に関するデュ・カンの証言だけは、どうしても不可解だった。そして、デュ・カンの言にたいしては殊更のように身構えてきた今世紀前半の批評家たちが、この点に関するかぎり、唯々諸々としてこれを信じ、みずからの主張の根底に置いているのも、考えてみれば奇妙に思えるのである。

註

- (1) Albert Thibaudet, *Gustave Flaubert*, Gallimard, 1935, p. 71
- (2) Lettre à Maxime Du Camp, 1852年 6月26日 *Correspondance II*, Édition établie, présentée et annotée par Jean Bruneau, Bibliothèque de la Pléiade, p.p 113 – 115 Lettre à Maxime Du Camp, 1852年7月初め *Ibid*, p.p 120 – 122
- (3) Maxime Du Camp, *Souvenirs littéraires*, tome I, Hachette, 1882 – 1883, p. 180 拙訳『文学的回想』富山房百科文庫, P. 30
- (4) *Ibid*, p. 185, 拙訳 p.p 37 – 38
- (5) Marthe Robert, *En haine du roman*, Balland, 1982
- (6) Docteur Galerant, «Flaubert vu par les médecins d'aujourd'hui», *Europe*, septembre–octobre –novembre. 1969
- (7) Maxime Du Camp, *Op. cit.*, p. 181, 拙訳 p. 32

- (8) たとえば, *Lettre à Ernest Chevalier*, 1844年6月7日, *Correspondance* I. p. 207, *Lettre à Louise Colet*, 1852年7月6日, *Ibid*, II, p. 127
- (9) Maxime Du Camp, *Op. cit.*, p.p 180 – 181 拙訳 p.p 31 – 32
- (10) “ ... Je suis encore au lit avec un séton dans le cou, ce qui est un hausse-col moins pliant encore que celui d’un officier de la garde nationale, avec force pilules, tisanes et surtout avec ce spectre mille fois pire que toutes les maladies du monde, qu’on appelle Régime. » A Ernest Chevalier, 1844年2月1日, *Correspondance* I. p. 203 « Oui. vieux, j’ai un séton qui coule et me démange, qui me tient le cou raide et m’agace au point que j’en ai des suées. On me purge, on me saigne, on me met des sangsues, la bonne chère m’est interdite, le vin m’est défendu; je suis un homme mort. Je ribote avec l’eau de fleur d’oranger, je me fous des bosses de pilules, ... Sais-tu jusqu’ où doit aller ma tristesse et comprends-tu que je vive? La pipe! oui la pipe, oui tu as bien lu la pipe, cette vieille pipe: La PIPE M’EST DÉFENDUE!!! » Au même. 1844年2月9日, *Ibid*, p. 204
 « ... il est dit que ce bienheureux nicotiane me sera refusé et qu’au lieu de l’aimable et gracieux Chambertin je boirai de l’eau de fleurs d’orange et de tilleul, ... » Au même, 1844年7月, *Ibid*, p. 212
- (11) Maxime Du Camp, *Op. cit.*, p.p 297 – 298
- (12) この点に関しては, 拙著『ギュスターヴ・フロベール研究』(駿河台出版社, 昭和58年) 第四部, 十五「結論に代えて—『感情教育』の位置, 及びなぜ書くか? —」参照
- (13) *Europe*, septembre—octobre —novembre, 1969, p. 108
- (14) Marthe Robert, *Op. cit.*, p. 72
- (15) *Ibid*, p. 75
- (16) *Lettre à Louise Colet*, 1852年1月16日, *Correspondance* II, p. 30
- (17) Maxime Du Camp, *Op. cit.*, tome I. p 161
- (18) Albert Thibaudet, *Op. cit.*, p. 46
- (19) Marthe Robert, *Op. cit.*, p. 83
- (20) *Ibid*, p. 84
- (21) Maxime Du Camp, *Op. cit.*, p. 185 拙訳 p.p 34 – 35
- (22) *Ibid*, p. 184 拙訳 p.p 36 – 37 1843年2月というのはデュ・カンの誤り。正しくは1844年4月である。
- (23) 拙著『ギュスターヴ・フロベール研究』 p. 16
- (24) Maxime Du Camp, *Op. cit.*, p.p 183 – 184 拙訳 p.p 35 – 36